「岩宇・寿都地域振興プラン作成委員会」が開催したシンポジウム。札幌市のＮＰＯに委託して今年７月から８月にかけて実施した、寿都町でのアンケート結果の紹介や、地域の宝の掘り起こしに関する講演などが続いた（９月９日、岩内町内で）

〝核のゴミ〟レポートＰＡＲＴ36　〝原子カマネー〟に頼らない地域づくりをめざす試み

地域を磨くか核に頼るか

アンケート調査で分かった寿都町民の本音と憤りとは

後志管内の寿都町と神恵内村を対象に始まった〝核のゴミ〟最終処分場の候補地選定に向けた動きの中で問われているのは「原子力マネーに依存する道か」、それとも「地場資源を生かし、自立する町づくりをめざすのか」の選択でもある。この夏、泊原発周辺の住民団体が札幌のＮＰＯ法人に委託し、寿都町民を対象にしたアンケート調査を実施したが、その結果から町の将来に対する世代間の捉え方や、ＮＵＭＯ（原子力発電環境整備機構）が進めてきた「文献調査」によって住民が分断されたことへの憤りも伝わってくる。アンケートで見えてきたことをはじめ町づくりシンポジウムの様子や、地場資源を生かした事業を展開中の吉野寿彦さんの講演内容を紹介しよう。

（ルポライター・滝川　康治）

住民団体がＮＰＯに委託して寿都町民を対象にアンケート

９月９日に岩内町内で開かれた、「どうする原発に頼らないまちづくり」をテーマにしたシンポジウム（主催＝岩宇・寿都地域振興プラン作成委員会）。同会が札幌のＮＰＯ法人「北海道地域・自治体問題研究所」（河野和枝理事長）に委託し、寿都町の１３００世帯を対象に実施した「地域資源についてのアンケート調査」の報告があった。

「多額の〝原発マネー〟は地域経済の発展に貢献したのか？」「（そのお金が）多様な地場資源の存在を見えづらくさせていないか？」「原発は過渡的なエネルギーであり、いずれ廃炉の時期がくる」という問題意識の下、「文献調査」に伴う交付金の影響がまだ少ない段階で、町づくりに対する見方を問うたもの。回答数は１６８（全体の13％）にとどまったが、住民意識の概要が浮き彫りになった。（詳細は同法人ＨＰにも掲載済み（dojichiken.blogspot.com/2023/09/blog-post_23.html）

「調査結果によると（回答者の）64％が『寿都町は暮らしやすい』と感じており、残り36％は交通の便や仕事の少なさ、除雪が悪いなどの理由で『暮らしづらい』と答えた。20～30代では後者の人が多く、町の将来にとって懸念材料と思います」

「『自慢できる地域資源は？』との質問には、海産物が圧倒的に多く、水産加工、温泉、風力発電が続く。７割が風力を肯定的に捉え、今後についても６割が『必要』と回答。一方で、（風力発電の弊害について）さまざまな情報が入っているためか、若い人たちは『風力増設は必要ない』の比率が高くなっています」

ＮＰＯ法人副理事長の小田清さん（北海学園大名誉教授）は、調査結果に示された世代間の捉え方の違いについて、こう解説した。

世代間ギャップの傾向は、定住志向をめぐる回答にも表れた。

家や土地がある、自分が育った町、自然が豊か、医療・福祉が充実などの理由から「今後も住み続けたい」が67％。その一方で、日常生活が不便、冬場が厳しい、人口減少、働く場所が少ないなどを理由に、17％の人が「住み続けたくない」と答えた。年代別では20～30代の多くが後者と回答し、「今後の心配材料」（小田さん）になっている。

アンケートに示された寿都町民の捉え方について解説する小田清さん

地域資源で持続可能な町づくり「自由記述欄」には率直な意見も

「10年前に比べ、町はどう変化したか？」との質問には、半数近くが「少し悪くなった」「悪くなった」と答え、30・60・70代の人にそうした傾向が強かった。

この調査では、町民間に無用な混乱をもたらさぬよう配慮し、『文献調査』をめぐる直接的な質問を避け、自由記述欄で地域づくりについての意見を書いてもらったという。

「そこには『文献調査』による町民間の分断に心を痛める意見が寄せられ、本来の穏やかな寿都町に早く戻るよう希望する人が多かった。今後は、周辺町村の人との連携も含め、多様な地域資源の組み合わせで持続可能な地域づくりを考える必要があります」と小田さんが提言。

シンポジウムでは、寿都町内で水産加工や海鮮食堂の事業を展開する吉野寿彦さんによる、地域資源の活用事例についての講演（別稿を参照）を受け、意見交換も行なった。

「後志の秋サケは岩内が最も漁獲量が多いけれど、二次加工して流通に乗せておらず、付加価値を高める方式になっていない。漁獲が減った分の関連人口が泊原発に行っている」（作成委員会の佐藤英行代表）

との現状報告があり、会場からは、

「福祉や子育てが充実し、認知症になっても幸せに暮らせ、自分の町に住み続けたい――と若い人たちが考えることが大切。自分の町を暮らしやすくしていくことが活動のベースではないか」（余市町民）

「故・内橋克人さん（経済評論家）が提唱した『ＦＥＣ（食料・エネルギー・福祉）自給圏』を基盤に考えること。原子力に依存する前に、自給的にやっていた事例を発掘し、パワーアップを」（北大の研究者）

「地元住民の分断は『生命や人権の問題だけは毅然と対応すること』ができない日本人の弱さがあるのではないか。本質論と現実論を使い分け、『対立しないで生きていこうよ』と言いたい」（札幌市民）

といった指摘や提案が相次ぎ、今後も地域資源の発掘を通して寿都町や神恵内村の人たちに寄り添っていくことを確認した。

寿都町で水産加工や海鮮食堂を続ける吉野寿彦さんの講演から

前浜で水揚げされる魚介類に着目 自前の商品化で地域に顧客を呼ぶ

（よしの・としひこ）1959年、寿都町生まれ。高校・大学時代を札幌で暮らし、22歳の時に家業の雑貨店を継ぐ。31歳で水産加工業「㈲マルトシ吉野商店」へ転換。サケの『寒風やぐら干し』を生みだす一方、地元の水産物を使った海鮮食堂『かき小屋』と『しらす会館』も経営中。寿都町歌棄町在住

経営セミナーの受講を契機に独自のブランディングを追求

わたしは高校、大学と札幌で暮らし、22歳のころ母親が病気になり、家業の雑貨店を継ぐため寿都に帰ってきました。当時は、酒や米、塩、煙草…とドル箱になる商品を扱っていたのですが、世の中が全く見えておらずアウトドア三昧の生活。「25歳になったらしっかりしよう」と思っていた。30歳で結婚しましたが、新婚旅行から帰っても売り上げがない、と。親父は雑貨商のかたわらウニやアワビの漁師をやり、その水揚げが（年間）４００万円くらいありました。

わたしは商売のテクニックや思想を持たずに継いだから、父が漁に出なければ無収入、積み立てた定期貯金を取り崩していくわけです。お客さんが来ないと電気を消すなどネガティブな商売のやり方でした。

そんな中、税理士から「経営セミナーを受けずに事業をやるのは、無免許で車を運転するのと同じ」と指摘され、心に刺さりました。そこで、60万円を払って札幌でセミナーを受講することにしたのです。

ツブ貝の加工も始めました。岩内町にあった北酒販の所長が訪れ、「いろんな所にツブが売れるよ」と。そこで、茹でたツブを冷凍して温泉地などに卸したのが、うちの水産加工の始まりでした。年間30トン近く扱うようになり喜んでいたら、（93年の北海道南西沖地震で）トラックに積まれた奥尻島のツブが流され、全く入荷しなくなった。

雑貨商から水産業に転身し、工場を建て、行け行けの時期でしたが、その生命線を絶たれたのです。女房と「倒産するかもしれないな…」と話し、危機感を抱きましたね。その後も10年間、下請けでツブを扱いましたが、セミナーの経験は全く生かされず、60万円をドブに捨てたような形になったのです。

大量に揚がるサケに着目し『寒風やぐら干し』を商品化

37歳の時、ある業界紙に釧路の水産加工会社社長の生い立ちが載りました。ゼロから始め、年商１５０億円の売り上げがある、と。そこで、「サクセス・ストーリーを教えてほしい」と電話し、釧路まで飛んで行き、その社長から「前浜で一番水揚げされるものに目を向けよ！」とのアドバイスを受けました。

そんな中、家の軒先にサケを吊るして寒干しすると家族から好評で、味が良くなるんだな、と気づいた。折しもサケは大漁、寒干しして札幌近郊のスーパーに持って行くと売れに売れた。翌年も6千本ほど仕入れたんですが、干す場所がない。櫓（やぐら）を造り、そこで寒干しするようにしました。

10年前の経営セミナーで学んだブランディングが（自身に）フィードバックしてきた。ただ、勘違いしたのがネーミングです。思いつきで『寒風やぐら干し 鮭寿』と名づけ、商標登録もした。でも、皆さんは「けいじゅ」とは呼ばず、「サケ寿司」とか「エッ鮭児。こんな高い魚！」と勘違いする。今でもそうです。だから、ネーミングはすぐに分かるものにしないと苦労します。

「櫓に季節感がある」と、いろんなメディアに取り上げられました。でも、物は全然売れない（笑）。かつて北海道の新巻サケは「ふるさと小包」で飛ぶように売れたけれど、世の中の嗜好が変化し、脂のあるサーモンに変わっていった。そんなことに気づかず、サケを担いでニセコやススキノなどで試食販売して、ブランディングに努めていたんです。

岩手に学んで『かき小屋』開設 〝目的移動〟の人を呼び込む…

「地域に人を呼ぼう！」「寿都で味わってもらおう！」が、わたしの目標になりました。15年前に道の駅「みなとま～れ寿都」がオープンした時、ゴールデンウィークにうちの店を訪れたお客さんはひとりだけ。（道の駅の）隣の水産加工屋さんに聞いたら20人。道の駅には２００人でした。今では、うちの「かき小屋」と「しらす会館」を合わせると、ＧＷ中には毎日1千人が訪れます。

（顧客が）目的移動で商品を見つけることが大切です。それには、すごくエネルギーがいるし、（失敗した時の）リスクは怖い。家族間の摩擦もある。でも、ありきたりのことをやっても売り上げは伸びません。

2人の息子は寿都に帰ってきました。彼らが小さいころ、寿都の自然環境にどっぷり漬けたから、田舎にいることの価値観は十分に持っている。この環境の中で良い商品を創り、ＳＮＳなどの媒体を使って全世界に発信する、と。商品を育て町おこしをするため、息子たちにはどんどん展示会に行かせています。

わたしが「かき小屋」を始めた理由に、「〝目的移動〟のひとつとして考える」があります。（11年3月初めに）ＮＨＫの朝のニュースで、岩手県山田町のカキ小屋が紹介されました。スコップでカキを積み上げるシーンを見て、「これを寿都でやれば大当たりするぞ」と思い、すぐ山田町役場に電話し、「地元のカキの内需を拡大したいから、取材させてほしい」とオファーしたんです。

交通費とスケール、メモ帳を用意して山田町に飛び、カキ小屋のテーブルなどの寸法を計測し、寿都で同じことをする方法を教えてもらいました。しかし、その1週間後に起きた東日本大震災による大津波で、カキ小屋は全滅し、なんともスリリングな視察になってしまったのです。

吉野商店が営む「しらす会館」。目の前には寿都湾が広がる

寿都に戻り、物置を改造した「かき小屋」にテーブルを入れ、駐車場もトイレもない状態でオープン。車が次々に訪れ、すごい勢いでお客さんが入ってきました。スコップでカキを積み上げる場面を見て、「食べたい！」となる。「（サケに比べて）商品の持っているエネルギーが全然違うんだ」と思いましたね。地元にたくさんの人が来てくれるという、わたしの夢が叶ったんです。

お客さんはひとりたりとも帰したくありません。「欠品させずにどう頑張るか？」がキーワードです。それが商品がバズるかどうか決まる要素でしょう。リスクを抱えながら、ちょっと芽が出たらブランディングしながら形を整えていくとモノになっていく。岩内やニセコには大勢の人が訪れるのだから、見方を変えると新しい商品ができて内需拡大につながり、いろんな業種に就ける人たちが増えると思います。

■㈲マルトシ吉野商店
寿都町字歌棄町美谷２０６―１
☎：０１３６・６４・５０１８
yoshino-yagura.jp/index.php

※筆者のＨＰ「滝川康治の見聞録」https://takikawa-essay.com/ に本シリーズの過去記事を収録しています。ご参照ください。

◎自由記述欄の回答まとめ

	の願い！
62	◆　働きざかりの年代者がもっと動くべき。高齢者も含め「そんなことをやってどうする！」という声が強すぎるし、「だったらヤメた！！」という意見がでるのも淋しいかぎり。「だめもと」「失敗」してもいいから行動に移してほしいし、「大らかな気持ち」で見まもってほしい。
63	◆　寿都町の皆様は寿都を愛している方々が多いです。でも、皆さん車で町外に買い物に行く人が多く、町の商店の方は頑張っているのにかわいそうだと思います。店が一軒一軒なくなるのは寂しい限りです。
67	◆　古い考え方が悪いのではなく、新しいことを含め、昔を大切にしつつ新しいことにもチャレンジしてほしい。”旅の人”ではなく、町外からの観光を大切にしてほしい。寿都町を閉鎖的な町にしてほしくはない。
69	★　核のゴミ問題で、反対の人たちと町外の変な人たちがビラをまいたり、気持ち悪いことが増えてきた。どうして議論したり考えたりすることに否定するのだろう。自分の町さえ良ければ、自分さえ良ければいいのだろうか。アンケートも誘導されているような内容でいやな気がする。
73	寿都町職員が町民とふれあう様子が見られないことが残念です。
78	◆　自然豊かな町をこれ以上汚さないでほしい。風車やめてほしい。仕事の関係で直接町へ言えません。伝えてほしいです。
87	◆　老人ホームに入所の場合、料金を安くしてほしいです。
90	◆　①東川町はなぜ移住者（定年退職者ではない）が増えたのか。寿都町で参考にできることはないのか。 ②　寿都町の観光資源は沿岸沿いの他町と似たり寄ったりで魅力はないと思うけど、水産物はふるさと納税で上位町でもあるし、観光客を呼べる水産物のイベント（従来とは違う新しいものも）があればとは思う。
93	◆　町民を動かしてまちづくりをしようとか、机上の空論。もう何度も見飽きた。夢見てつぶれていく。誰がお金を出すのですか？税金を？
94	◆　高齢なので先行きが不安に過ごしています。安心して次の生活ができるのか。寿都町に老人ホームができるのですが、スムースにその場所に入ることができるのか心配している。
96	◆★　今、寿都町では核のゴミ最終処分場に係る文献調査を町長が独断で受け入れし、その調査に係る支援金として2年間20億円の交付金が配分された。現時点で町財政が行き詰まっているわけではない。 　この受け入れにより町民の分断がおきて、今まで和やかに会話してきた知人や友人、場合によっては家族とも口をきかない状況が生じ、寿都の町がぐちゃぐちゃになっている。民間人であるニューモ（NUMO）が町づくりのことにしゃしゃり出ることは到底受け入れられない。振興策の議論は筋違いである。 　核のゴミ処分場受け入れに断固として反対し、早く核のゴミに揺れる生活に終止符を打たなければならない。
100	★　放射性廃棄物処分場建設反対。
101	◆★　近隣町村よりも、核ゴミ問題で一瞬にして仲の悪い町になってしまい、まちづくりと言われても協力する気持ちになれないです。自然豊かな寿都に戻してほしいです。
103	◆　町長には、今まで通り、町を引っ張ってほしいです。これからも期待しています。
111	◆★　「核のゴミ」文献調査を実施して2年を経過しようとしているが、過疎地域

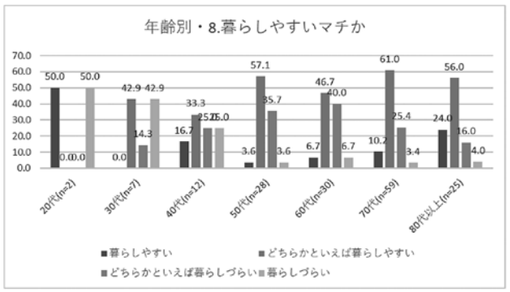
整理番号	
3	◆　商工業、漁業、農業において、後継者について真剣に取り組む必要がある。毎年のように商店が閉店しており、今ある商店も後継者がいない店が多く、地域応援隊を活用して、地域に根付く人たちを作っていくことが一番大切に感じる。
8	★　住民どうし腹のさぐり合い（最終処分場問題のため）。近所づきあい、友人どうし、わけへだてなく地域で暮らせる町にしてほしい。
10	★　核のゴミ問題で町民が二つに分かれてしまい、自由に話しもしずらく、元に戻らない気がしています。残念ですが。
11	◆　洋上風力発電は漁業等に工事等で振動や騒音の影響もあり、作らない方が良いと思います（コウナゴ等もいなくなるのではないか）。海も汚れる（工事で）。
13	◆　町おこし、町づくりは行政では無理なのかも。町民主体の町おこし、町づくりが強固となる。そう思います。
15	◆　もっとスモールな町づくりで十分だと思う。10年後も50年後も変わらない世界を望む。
17	◆　地域づくりには役場（職員）が果たす役割が大きい。寿都町に限ることではないが、役場職員の仕事や役割に対する姿勢は疑問に思うところが多々ある。
20	寿都町は一番です。
22	◆　地域づくりはそこに住む人が積極的に関わることから始まります。関わりを高めるためには行政がヒザづめで（本気で）人を発掘しなければ、全てがあなた任せになります。結局は金に頼ることになり、人任せになります。行政が人づくりを本気でやる。
24	◆★　ボランティア活動（自分に合った）を、もう少し活発化する。初めは行政が関与し、その後、主体的に動けるように支援してほしい。生きがいにつながるといい・・・。核ゴミの文献調査を止めてほしい。国レベルで考えることだ。
27	◆　海を生かした寿都町！
35	◆★　まちづくりの話には参加したいが、核のゴミと関連づけられると参加しずらい・・・。
37	◆★○　国の進める事業にもっと取り組み、協力的に関わってほしい（特定放射性廃棄物最終処分に関する研究等）。
39	◆　田舎の地域が衰退するのは、国の政策の誤りもあるが、住民の物欲の増にもある。少数の人口でも各々がキラリと輝くものを持ち、まちに活かすことがまちづくりである。決して与えられたものに満足することなく、自らが町に与えるという気持ちが大事。子供から高齢者、全ての人が自分の意思で決めて行動することである。
40	寿都町民は新しいことに挑戦する、新しいことを取り入れようとする考えがない町なので、つぶれる町だと感じている。
52	★　核のゴミ問題を早く解決し、分断を解消しないと地域づくりが成り立たない。
56	◆　町民が誰一人取り残されず、心にゆとりを持って安心して暮らしていけるような地域づくりにしていただきたいです。また、寿都の魅力を深掘りしてさらに発展できるよう一町民として期待しています。
59	◆★　人々を魅了するのはやはり自然の相ではないでしょうか。目先の金にとらわれる行政は好ましくありません。核のゴミは10万年の”死源ゴミ”です。それに頼らずとも「果てしなき可能な夢がそこにある」と伝えたい。」
61	◆★　核のゴミ問題を解消し、農漁業を中心とした寿都に戻してほしい。一町民

	による財源悪化から交付金を目当てに調査を推し進める現町長の考え方には賛同できず、これからの調査について直ちに撤回することを強く要望する。小さな町でもよい。風評被害のない水産業・加工業の振興を期待する。
112	◆　いろいろ楽しく、のんびり生活できる町であってほしいです。
114	◆　特に何か振興するという必要はないと思う。住んでいる人が不自由することなく暮らせれば良い。だから無人で稼げるシステムは重要。
115	◆　高齢の親と同居している。親は90代。認知症もなく今のところは健康に過ごしている。子供と一緒に住んでいる事で高齢者が受けている補助的なものを全く受けていない。該当しないため案内も来ない。国民年金のため、もらっている年金額は年61万円程度。生活が出来ないから子供と同居しているのに、介護保険は最高額引かれている。介護保険は一度も使用したこともない。お年寄りが住みやすい町にしてほしいと切実に願っている。
117	◆　既存キャンプ場の整備。浜中海岸の風と波を活かしたウィンドサーフィン等、アクティビティの大会。ゆべつの湯周辺に大きなキャンプ場を。
121	◆　住む人がまちの何かを「愛（め）でる」気持ちが広がり、深まりをみせるようになればと思う。
126	◆★　孫・曾孫の代まで平和な町であってほしい。核ゴミ処分場なんてものは作って欲しくない。町長も変わって欲しい。おだやかな街にに戻ってほしい。
127	日常生活が不便。交通の便が不自由。
132	◆　自然が豊かだけだと人口は減り続けると思います。他の町と変わったことを何かしないと。
140	◆　人口減少が止まらない寿都町（寿都町だけではありません日本全体が人口減少、人材不足です）。このままでは新しい産業を興すどころか、今ある産業を維持するのも難しい状況です。そんな中、士別市の外国人労働者の受け入れの取り組みが参考になるのではないでしょうか。寿都でも40人程の技能実習生がまちの水産加工業を支えています。今後、労働力としてだけでなく、地域の一員として受け入れ、結婚し、定住してもらえるような地域社会を作っていくことが必要ではないでしょうか。
146	◆　寿都町は働くところがないので若い人達がいません。何とか若い人達が寿都のまちに残って働ける場所が出来てくれることを願っております。
148	◆　町の現状はモノ言えぬ雰囲気、言わせない雰囲気が全てつくっていると感じます。町長への個人的な感情は抜きに、やはり町長の姿勢、町長のつくる空気が町全体へ波及していると思います。トップの「聞く力」が自然と住みよいまちをつくっていくと考えます。
149	◆　診療所以外の病院と言われても、交通の便が悪いので町ではこのような人のために何か良い方法がないのか考えてほしいです。例えば介護タクシーの予約とか？
153	◆★○　産業振興の取り組みには財源が必要であり、その財源確保のためには核廃棄物関係の協力金（次のステップへ）及びふるさと納税の規模を拡張するなどして財源を得ることが必要だと思う。
159	◆　うそや隠しのないクリーンな町政。。若い世代にも参加してもらえるような町政づくりを。
166	★　文献調査が終了になり、概要調査以降は中止させること。

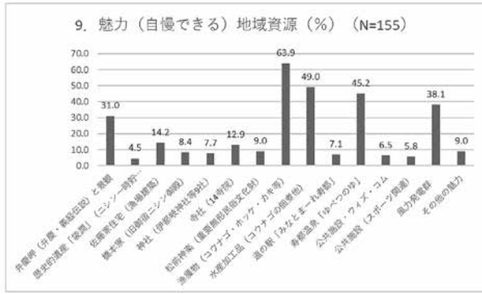
※調査方法と時期～寿都町内の約 1,300 世帯にアンケート用紙を送付。後日、回答用紙を郵送してもらう方式。2023 年 7 月～8 月実施。※回答数～ 168 通（回答率 12.9%）

◎選択記述の回答結果

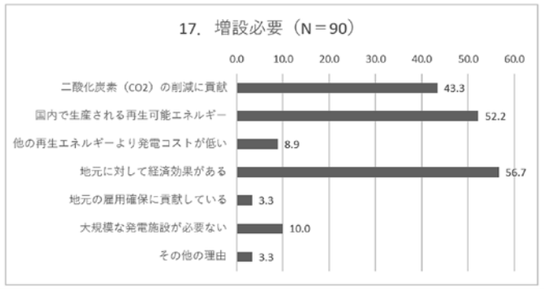
暮らしやすさ（年齢別）～　若年層は暮らしづらい



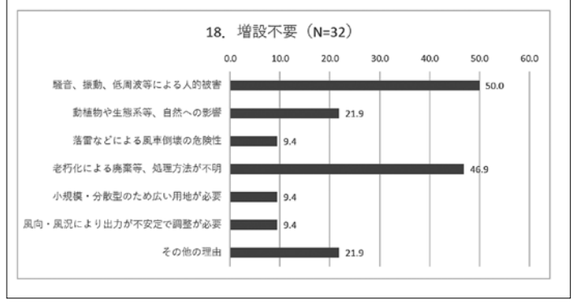
自慢できる地域資源～　漁獲物・加工、温泉、風力発電、弁慶岬



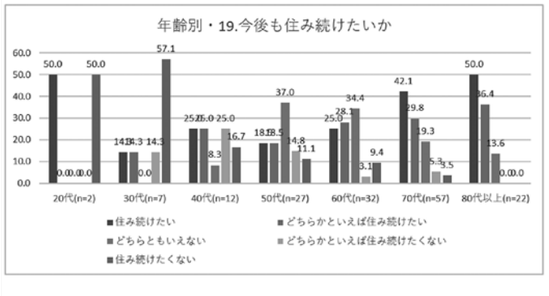
風力・増設必要（理由）～　経済、再エネ、CO2



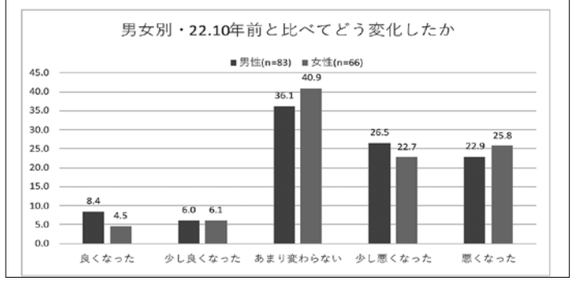
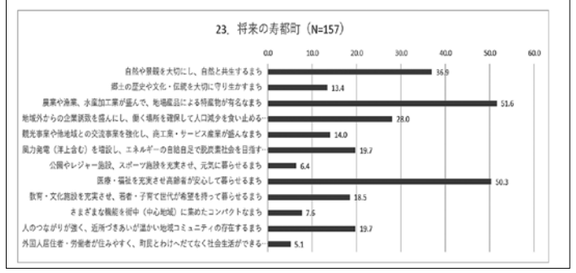
風力増設・必要ない（理由）～　人的被害、廃棄



今後も住み続けたいか（年齢別）～30代は住み続けたくない



10年前との比較～　良くなった等12.5%、
悪くなった等49.0%、変わらない38.5%



将来の寿都町～　地場産品、医療・福祉の充実、
自然環境、企業誘致・働く場所